

---

# **あけみ ~コナン哀ものがたり・番外編5~**

サブラピッド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あけみ～コナン哀ものがたり・番外編5～

### 【Zコード】

Z8238C

### 【作者名】

サブリピット

### 【あらすじ】

桜咲く公園で、「コナンと哀は、「あけみ」と呼ばれた少女に出会います。その子は、以前、「コナンが助けた女の子。彼女は、今日、小学校に入学したのでした。

(前書き)

哀の姉、明美を想つコナンと哀のお話です。

帝丹小学校の入学式の日。2年生以上は、春休み中。4年生になつた江戸川コナンと灰原哀は、桜の咲く公園にやつてきていた。

「結構、綺麗ね」

哀が目を細めて言う。

「おめえの方が綺麗だよ・・・」

コナン本人は、サラッと言つた氣でいたが、顔が真つ赤で、あさつての方向を見つめている。

「・・・」

哀は、呆れた顔で黙つてコナンの横顔を見つめている。

しばらくして、コナンは、まだ呆れた顔をしてコナンを見つめている。哀を睨んだ。

「あんだけよ・・・何とか言えよ、ありがとう、とか、嬉しい、とか・・・」

「コナンの顔は、相変わらず赤い。」

「・・・あなた、そういうこと、サラッと言えるような人だつたかしら?」

「人間、変わんだよ。付き合う人間によつて・・・おめえだつて、変わつたじゃねえか」

哀は、クスッと笑うと、コナンの耳元に顔を近づけて囁いた。

「ありがと」

公園の向こうの道を小学校の入学式帰りらしい親子が何組か歩いている。そのなかの一組の母子に、コナンの目が留まつた。

「どうしたの?」

哀が少し不審そうにコナンに訊いた。

「あら？ ロナン君？ …… ロナン君じゃない？」

母親の方から、ロナンを見とめ、近寄ってきた。

「あの時は、本当にありがとうございました。朱美ね、一年生になつたのよ。今まで、帝丹小学校の入学式だつたの」

「あけみ」とこつ短前に、哀の肩が小さく揺れ、瞳がその子を見つめる。

「そう・・・朱美ちゃん、大きくなつたね」

「ナンが朱美に微笑むと、朱美も笑つた。

「朱美ね、ロナンお兄ちゃんと一緒に学校に入つたんだよ」

母親は、ロナンの隣にいる哀の顔を見て微笑んだ。

「あら？ ロナン君のガールフレンド？ 可愛いわね」

「うん！ 灰原哀さんって言うんだ」

子供らしく答えるロナンを横田に、哀が頭をひょいと下げる。

「ひんにちは」

「ひんにちは。灰原さんも、朱美をよろしくね。じゃ、ロナン君、またね」

「バイバイ」

朱美が手を振つて、母親に手を引かれて行つた。

「誰？」

「一人が離れると、手を振つているロナンに、哀が訊く。

「うん？ ほら、白鳥警部が怪我した連續爆破事件のとき、東都タワーのエレベーターに閉じ込められられてた女の子と、そのお母さん」手を振りながらロナンが答える。しばらくして、一人が見えなくなると、ロナンは、手を振るのをやめ、哀の方に向き直つた。

「あけみつて名前だつたんだよな、あの子。字は違つけど、おめえの姉さんと同じだつたな」

哀は、横を向くと、少し歩き、花びらを舞い散らしている桜の木の傍へ行つた。

この公園で一番大きな桜の木。その木を見上げている哀の表情は、コナンには見えないが、姉のことを想つているだらうことは、よくわかる。

コナンは、哀の後に立つた。その細い体を抱きしめたくなり、腕を伸ばしかけたコナンだったが、人目のある公園であることに気づき、思い留まつた。

しばらぐ、桜を見上げていた一人だが、やがて、コナンが、ポンと哀の頭を軽くたたくと、声をかけた。

「行こうか」

「ええ」

哀も短く答え、一人で歩き出す。

「コナンには、わかる。

哀は、決して顔に出さないが、家族を失つた悲しみ、辛さを抱え、心で泣いていることを。

姉、明美が借りていたマンションの部屋、そこでの留守電に録音されている明美のメッセージの声が聞きたくて、組織に察知される危険を承知で電話していた哀。

早くに両親を失い、その顔すら口に知らない哀にとつて、姉、明美の存在は、ほとんど唯一と言つていい肉親。その姉の悲劇の死に、立ち会つていたこともあって、コナンにとつて、哀の姉を救うことできなかつたことは、おやぢく、一生の重荷になるのだろう。

「気にしないで」

「あ？」

不意な哀の言葉に、コナンは、少し戸惑った。

「お姉ちゃんのこと、あなたが気にする必要はないわ・・・それに、あなたのこと、お姉ちゃんも感謝していると思う・・・だから、気にしないで・・・」

コナンの心を見透かすような哀の言葉。そして、彼女は、瞳を揺らしてコナンを見た。

少し悲しげな顔。でも、その顔をコナンは、本当に綺麗だと思った。

\* \* \* \* \*

『心配なのは、志保・・・あなたの方よ』  
（もう、心配はいらないわ、お姉ちゃん。私、一緒に生きていける人を見つけたの）

『お姉ちゃんは、大丈夫だから・・・』  
（お姉ちゃん、私に心配かけまいとして・・・でも、なんとなく、わかつっていた）

『お姉ちゃんは、大丈夫だから・・・』  
（私のためでしょ？・・・危険を承知で、私を組織から解き放すために・・・）

『大丈夫だから・・・』  
（お姉ちゃんは、いつも、私のことを考えててくれたわね。自分のことを後回しにして・・・）

『大丈夫だから・・・』

(どうして? どうして、逝ってしまったの。私を置いて……会いたい……会いたいよ……お姉ちゃん……)

明美の顔は、微笑んで哀を……志保を見つめ、その声は、あくまで明るい。

しかし、なぜか哀の想いは、声にならず、声に出せず、胸の中で広がっていくだけだった。

哀は、微笑んでいる姉を見つめた。

やがて、声が聞こえなくなり、その笑顔も、すっと薄くなつて、やがて、消えてしまった。

(お姉ちゃん! )  
(お姉ちゃん……)

哀は、叫んだが、声にならない。あたりを探しても、もう姉の笑顔もなく、声も聞こえなかつた。

伝えたいけど、もう届けられない想い。そして、もう届かない大切な姉の想い。

届けられない、哀の言葉。届かない、姉の言葉。

\* \* \* \* \*

コナンが阿笠邸のリビングに入ると、ソファで眠っている哀の姿が目に入った。その表情が寂しげなのが気になつたが、起きないように、そつとタオルケットをかけてやつた。

そして、向かい側のソファに座り、哀の顔を見ていた。

寂しげな顔。口元が動いている。

「…………おね…………ん…………ねえ…………うや…………」

「コナンは、哀の傍にしゃがみ込むと、時折、ピクッと動く哀の手を握った。

フツ。哀の表情が動き、幾分、穏やかになった。

しばらくすると、哀の臉が開き、碧く澄んだ、コナンの大好きな瞳が現れた。

「く……ビウ……くん？」

始めは、焦点の合っていないなかつた哀の瞳は、コナンの顔を認めて、小さく力が宿つた。

「起しちまつたな……」「めん」「……」「うん」

哀は、自分の体にかけられたタオルケットをみどめると、コナンを見つめて言つた。

「これ……ありがと」「うん……」

哀は、体を起し、ソファに座りなおす。

「コナンが右隣に座ると、哀は、その体にもたれかかった。その細い肩にコナンの左手が置かれる。

「姉さんの」と、思い出させちまつたな……」

「コナンは、右手で、少し乱れた哀の前髪をそっとかき上げると、哀の手を優しく握つた。

「・・・お姉ちゃんね、私のために・・・私を組織から抜けさすために・・・危険を承知での事件を・・・そして、逝っちゃった・・・」

哀の姉、宮野明美は、妹の志保と共に、組織から抜けることを条件に、その指示通りに10億円強奪事件を起した。しかし、その後、ジンに撃たれ、コナンの見守る中、この世を去った。

コナンは、哀の体を自分の方に向けさせ、ゆっくりと抱きしめた。

「おかしいわね・・・普段、気にしてないつもりでも、『あけみ』って聞いただけで、お姉ちゃんのこと思い出して、胸が痛むの・・・」

抱きしめた哀の顔は、コナンからは見えない。

「それだけ、おめえにとつて、姉さんが大事だつてことだろ?・・・俺には、羨ましいよ」

「え?」

少し体を離し、コナンの顔を見つめて哀が不思議そうに首をかしげる。

「俺には、兄弟はないからな・・・大切に思える兄弟がない・・・だから、お姉さんという存在がいるおめえが羨ましい・・・」「でも、死んじゃつたわ・・・」

「それでも、おめえの胸ん中に生きてるだろ?・・・その証拠に、夢でおめえに話かけてくれるんだろ?明美さん・・・それなら、十分、素晴らしい存在じゃねえか。俺にはない、いい姉さんを持つてんだ、おめえ。それって、羨ましいよ。自慢していいと思つぜ」

「コナンは、哀の目をまっすぐ見つめて言つた。

フッと、哀の表情が緩む。微笑んで、それでも、涙が細く、頬を

伝つた。

「工藤君・・・ありがと」

コナンが哀の頬の涙を指でそつと拭つて、哀がコナンの胸に顔をうずめてきた。

「おめえの姉さん、命を賭けて、おめえを守つたんだ・・・幸せになんねえと、承知してくんねえぜ・・・」

「・・・もう、十分幸せだわ・・・誰かさんのお蔭でね」

小さな二つの影は、それから、長い時間、離れることがなかつた。

### (後書き)

筆者は、「ナン（新一）同様、兄弟がないので、兄弟間の情というものは、よくわからないところがあります。でも、家族で、一緒に同じ場所で、共に成長していく存在であるとすれば、やはり、かけがえのない存在だらうと思います。

筆者の周りの人には、ほとんど兄弟姉妹がいるので、羨ましいなと思うことがよくあります。そんなことを思い、書いてみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8238c/>

---

あけみ ~コナン哀ものがたり・番外編5~

2010年10月10日19時25分発行